〝核タブー〟平和な未来の前提

日本被団協のノーベル平和賞授賞理由

ノルウェー・ノーベル賞委員会が11日、2024年のノーベル平和賞を日本被団協に授与すると発表した声明文の全文は以下の通り（原文は英語）。

ノルウェー・ノーベル賞委員会は、2024年のノーベル平和賞を日本の団体、日本被団協に贈ることを決めた。被爆者としても知られる広島と長崎の原爆生存者による、この草の根の運動は、核兵器のない世界を達成する努力、また目撃証言を通じて核兵器が二度と使われてはならないということを身をもって示してきたことによって平和賞を受賞する。

1945年8月の原爆による攻撃に対して、世界的な運動が起こり、そのメンバーは核兵器使用がもたらす破滅的な人道的結果についての関心を高めるためにたゆみなく努力してきた。徐々に、力強い国際的規範が発展し、核兵器の使用は道徳的に容認できないとの悪の烙印を押した。この規範は〝核のタブー〟として知られるようになった。

広島と長崎の生存者である被爆者の証言は、この大きな文脈において、比類のないものである。

この歴史の証人は、個人の物語に依拠し、自らの体験に基づく教育的キャンペーンを創出し、核兵器の拡散と使用に対して緊急の警告を発することで、世界中で核兵器に対する幅広い反対をつくり出し、強めてきた。被爆者は、描写を超えたものを描き出し、思考を絶したものを考え、核兵器が引き起こした理解を超えた痛みと苦しみをどうにか理解する上で私たちを助けている。

ノルウェー・ノーベル賞委員会は、それにもかかわらず、一つの励まされる事実を認めたい。それは、過去80年近く1発の核兵器も戦争で使用されていないという事実である。日本被団協と他の被爆者の代表たちによる並外れた努力は、核のタブーの確立に大きく寄与してきた。だからこそ、核兵器使用に対するこのタブーが今日圧力を受けていることは、不安を呼び起こしている。

核大国は、保有核兵器を現代化・改良しつつある。新たな諸国が核兵器を取得する準備を進めているように見える。現在進行中の戦争で核兵器を使用するとの脅迫が行われている。人類史のこの瞬間において、核兵器とは何かを思い起こす価値がある。世界が目にしたこれまでで最も破壊的な兵器だということを。

来年は、米国が投下した2発の原爆が、広島と長崎で推定12万人の住民を殺害してから80年である。それに匹敵する数の人々が、その後の歳月でやけどや放射線障害で亡くなった。今日の核兵器ははるかに大きな破壊力を持っている。数百万人を殺害する能力を持ち、気候に壊滅的な影響を与えるだろう。核戦争はわれわれの文明を破壊しかねない。

広島、長崎の業火を生き残った人々の運命は長い間、隠蔽され、無視されてきた。1956年、各地の被爆者団体は太平洋での核実験の犠牲者とともに、日本原水爆被害者団体協議会を結成した。略称は日本被団協である。同団体は、日本で最大かつ最も影響力のある被爆者の組織となった。

アルフレッド・ノーベルの世界観の核心は、真剣に取り組む個人は変化をつくり出せるという信念だ。今年のノーベル平和賞を日本被団協に授与することで、ノルウェー・ノーベル賞委員会は、肉体的な苦痛と痛切な記憶にもかかわらず、大きな犠牲を伴う自らの体験を、平和のための希望と活動にささげることを選んだすべての生存者に栄誉を授けたい。

日本被団協は、核軍縮が緊急に必要だということを世界に想起させるために、数千の証言を提供し、決議や公的なアピールを出し、毎年、国連とさまざまな平和会議に代表を送ってきた。

いつの日か、歴史の証人としての被爆者は、私たちのなかに存在しなくなる。しかし日本の新しい世代が、力強い記憶の文化と粘り強い献身を通じて、被爆者たちのメッセージと体験を引き継ぎ、前に進んでいる。彼らは世界中の人たちを励まし、教育している。このようにして、彼らは核タブーを維持することを助けている。これは、人類にとって平和な未来の前提となるものである。

2024年のノーベル平和賞を日本被団協に授与する決定は、アルフレッド・ノーベルの遺志を確実なものにするものである。ノーベル賞委員会は、核軍縮と軍備管理の闘士たちに平和賞を授与してきたが、今年の授賞は、その輝かしいリストに新たに名を加えるものである。

2024年のノーベル平和賞は、人類にとって最大の利益となる努力を認めるというアルフレッド・ノーベルの遺志を実現するものである。

2024年10月11日　オスロ